

Eureka VI

六年制通信 No. 2 平成30年4月13日(金)号

表現の問題

最近「変わりゆく大学入試」というフレーズをよく耳にするようになりました。思考力・判断力に加えて、表現力を評価するというわけですね。これがなかなか難しいことは以前この通信でも触れました。言語の技術の中で、書く技術と話す技術というのは、つまり言葉を使って表現する技術は、西洋ではソクラテス以来の伝統もあって非常に重きを置かれています。ところが、私たちが日本語を使って表現する力を、一つの言語技術として習ってきたかという、これは大いに疑問です。私自身、高校の国語の授業を通して何が身についたかと問われても、正直ほとんど答えることができません。中学にいたっては全く覚えていません。よく、夏休み明けに読書感想文の提出を求められましたが、よく書けているとか、内容が薄いかといった評価はあったように思いますが、「書く技術」を論理的に習った記憶がないのです。もちろんプレゼンテーションなどといった単語も当時はなかったのも、人前で話す技術などは全くなかった。教える方にも習う方にもなかったですね。今の大人はずいぶんおしゃべりになりましたが、それに伴って、必要かつ十分な情報を整理して伝える技術が向上しているかといえば大いに疑問しいと思います。物ないし物事を描写する力をどのように養成するか。これから皆さんはこういった問題をクリアしていかななくてはなりません。一つの技術としての言語能力が求められているわけです。

話は変わりますが、表現の問題でいつも思い出すのは翻訳の話で、文化の違いがあるために訳しづらい言葉があるということです。有名なのは夏目漱石が「I love you.」を「(今宵の)月はきれいですね」と訳すように、学生に指導したという話ですね。二葉亭四迷は「死んでもいいわ」と訳したとか。あるいは市河三喜という英語学者は、いつそのこと「……………」でいいじゃないかと言ったとか。これらは明治初期の話で、男女を問わず「愛しています」などという単語を絶対に口にしなかった時代ですからね。当時の学生たちも、それで納得していたのでしょう。西洋の文学を日本に紹介しようと努力された先生方が、今では実にありふれた、どちらかといえば陳腐な言葉にも苦戦したという面白い例だと思います。

あるいは、例えば「ぶどう畑」という言葉でも、子供のころから聖書を読んでいるかいないかで、イメージする風景とか言葉の背景とかが全く違ってきます。ですから外国の人に「わかるように」書いたり話したりするのは、実は膨大な予備知識が必要なのです。それがないと致命的な誤解を招きかねません。

さて、外国語を学ぶということは母語に向き合うということでもあります。私たち

はまずは英語から入るのですが、自分の言いたいことを英語で表現できるまでには日本語自体のレベルを上げる必要があることに、きっと気がつくはずで。日本人らしい発話の仕方もよく理解しなければなりません。外国語を話す人々から見て日本語がいかにも不思議な構造をしているか、どういうところが難しく感じるのか、そういった視点も必要でしょう。

三森ゆりかさんの『外国語を身につけるための日本語レッスン』を読んでいたら、日本語のことを、これほど主語を示さずによく会話が理解できるものだと、例を出して驚いています。こんな例です。

「僕が出かけている間に△△社の〇〇さんが来たら、書類を受け取っておいてくれないか。二時頃持って来てくれる予定になっているから。事前に電話をしてくると思うよ。もしかしたら都合がつかないかもしれないと言っていたから。二時前後、いるよね？ 電話してきたら四時頃戻ると伝えておいて。できれば会って説明したいと言っていたから。じゃあ、よろしく」

書類を受け取るのは誰か。二時頃持ってくるのは誰か。電話してくるのは誰か。そう思うのは誰か。都合がつかないかもしれないと言っていたのは誰か。二時前後にいるのは誰か。電話してくるのは誰か。戻るのは誰か。伝えるのは誰か。会って説明したいと言ったのは誰か。以上、全く書かれていません。にもかかわらず、私たちには違和感なく理解できます。これを、主語を全部書くと…。

「僕が出かけている間に△△社の〇〇さんが来たら、君が書類を受け取っておいてくれないか。彼は二時頃持って来てくれる予定になっているから。彼は事前に電話をしてくると僕は思うよ。もしかしたら彼は都合がつかないかもしれないと彼は言っていたから。二時前後、君はいるよね？ 彼が電話してきたら僕が四時頃戻ると君が（彼に）伝えておいて。できれば（僕に）会って説明したいと彼は言っていたから。じゃあ、よろしく」となりますが、むしろわかりにくくなっています。主語の表記一つでも日本語は特異な言語のようです。英語の勉強を通して、こういうところにも関心を寄せていくといいでしょう。

今週のおすすめ

・プラトン 『パイドン』 (岩波文庫)

西洋哲学の源流にはプラトンがいて、どの出版社でも必ずと言っていいほど『ソクラテスの弁明』が推薦図書になっています。京都大学の哲学科ではこれを原語で読むことが必修になっているはずですが、古典ギリシア語を学ぶだけでも膨大な時間を要するでしょうね。私はもちろん日本語で読むのですが、『ソクラテスの弁明』より『パイドン』の方がソクラテスの魂に対する態度がよく書かれていると思います。哲学とは、死とか時間とか記憶とか魂の不滅とか、感覚で捉えられる世界とは別に非感覚的な世界が独立に存在するかとか、人間とはどういう存在かとか、そういった、とてもすぐには完璧な誰もが納得のいく答えの得られない疑問を考え続けることらしい。しかも、数学以上に「厳密な学問」らしい。難しそうですね。

BGM は柴田まゆみの 白いページの中に でした…。